



ウコギの栽培方法 —挿し木による栽培と利用方法—

はじめに

ウコギはタラノキ、コシアブラ、ウドと同じウコギ科の植物で、新芽には清々しい香りと苦みがあり、天ぷらやウコギご飯、ウコギうどんに利用します。また、トゲがあるのが特徴で、山形県米沢地方では古くから垣根としても用いられ、今でも街の景観のひとつになっています。ごく普通に森林内で自生しており、日陰や日当たりのよいところでも栽培が可能です。繁殖力が旺盛で、親株さえあれば挿し木による栽培で、3年目には収穫が可能です。

1. 挿し穂の準備と挿し木

挿し木の時期は3月から5月頃までで、挿し穂は、昨年伸びた枝でなるべく太い部分（5mm以上）を用います。休眠芽を最低でも2つ以上つけて15cm程度に切り、挿し穂に調整します。挿し床に用いる用土は硬質の鹿沼土単用で、あらかじめ十分に水分を与えておきます。挿し床に穴を割り箸などで穴をあけ、上下を間違えないように挿し、手で押さえて穂がぐらつかないようにします。挿し穂には発根剤をつけても構いません。挿し床は、直射日光のあたらない場所で乾燥しないように管理します。



2. 鉢上げと定植

挿し木後2から3週間で発根しますが、だいたい5～6週間で鉢上げをします。根を傷つけないように鉢上げし、小ポットに植え替えます。2週間は日陰に、その後は直射日光のあたる場所でも管理します。

定植は秋の彼岸過ぎか、春、芽が動く前に行います。ウコギは高さ2～3mに生長するので、株間は1.5mから2m程度あけて定植します。ウコギには棘があるので、株間を狭くすると後の管理作業が行いにくくなります。定植後は十分に灌水し、乾燥に注意します。乾燥気味の場合では敷き藁などをした方がよいでしょう。



3. 管理

作業性向上のため剪定を行う必要があります。理想的な管理方法は新芽収穫時に昨年枝を切り、その後株元から萌芽した芽を育てていく方法です。この方法では剪定・収穫・

挿し木が同時に行え、樹高を低く抑えられるので、効率的な栽培が可能になります。

病害虫の被害はほとんどなく、夏頃、葉柄が膨らむことがあります。枯死するような被害になることはありません。

この次期は収穫もしないので対策を講じなくても実害はありません。肥料は、晩秋に有機肥料を1株あたり5kgを周りに入れます。



4. 収穫

収穫は挿し木後、3年目から可能になります。春に出る新芽と晩春から初夏にでる徒長枝の先端の葉を収穫します。新芽は昨年枝よりでてくるものを使用し、苦みも少なくお浸しや、ウコギご飯などに利用できます。徒長枝の先端部分は、新芽に比べてボリューム感があるため、天ぷらなどに利用するとよいでしょう。



5. ウコギの利用法

(1) ウコギご飯

- ①収穫したウコギを1分程度塩茹でする。(塩の量は通常の2倍程度入れる。)
- ②ざるに上げた後、流水で冷やす。
- ③固くしぼって水気を切った後、みじん切りにする。
- ④ウコギの量の3割程度の塩を混ぜる。
- ⑤ゴルフボール1個分くらいの大きさに分ける。(これが米2合分くらいの分量)
- ⑥炊きあがったご飯に混ぜる。



残ったウコギは、個々にラップに包み冷凍保存しておきます。使うときは、解凍せずに炊きあがったご飯に混ぜます。ご飯の熱で十分に解凍できるとともにウコギの色の変化が少なくてすみます。時間が経つとウコギの色が変化してしまうので、食べる直前に混ぜてください。

(2) ウコギの天ぷら

ウコギを天ぷらにする場合、ウコギ単独で味わうのが基本ですが、苦さを強く感じる人が多いので、ウコギを下茹でし、刻んでタマネギなどとともにかき揚げにします。苦みが押さえられ、タマネギの甘みの中にウコギの香りを感じることができます。

監修：山梨県森林総合研究所
森林研究部 特用林産科
主任研究員 戸沢 一宏

編集：普及指導部
林業普及指導員 小田真二
TEL 0556(22)8010 FAX 0556(22)8002